

ナホトカに連行されたときと同様、貨車で移動した。ナホトカで八月中旬ごろまで土木作業をし、八月下旬に舞鶴港に上陸し、故郷に帰りました。

帰国後中小企業に就職していたが、二十五年春より魚介類の統制が解除されたので、魚介類販売を行う。その後若下の紆余曲折はあったが、現在まで頑張っています。

## シベリア抑留記

福島県 大和田 正巳

大正六年十一月十一日、福島県田村郡中妻村大字斉藤字斉藤七〇番地に出生す。

昭和十一年三月、県立田村中学校卒業。昭和十二年、満鉄営口商業実習所給費生に合格、渡満。営口にて一年間教育を受ける。昭和十三年一月十日、会津若松歩兵二九連隊留守隊第二大隊重機関銃中隊入営。四月十七日、ハルビン歩兵二九連隊本隊配属。五月十三日ハ

ルビン出発、徐州作戦従軍。十三年六月、ハルビン駐屯地帰着。七月十五日、牡丹江省掖河駐屯、約一年。昭和十四年七月張鼓峰作戦出動。九月六日、ノモンハン事変従軍。十月、牡丹江省掖河帰着。昭和十五年十月十八日、現役延期解除、除隊。

昭和十八年ごろ 勲八等旭日章、従軍記章並びに赤十字記章受領。

兵役除隊後、鶏西炭硯ハルビン本社に就職、東安省鶏西炭硯工業所経理担当。昭和十八年、密山炭硯ハルビン事業所に転勤。昭和二十年七月二十二日、臨時召集のため第一三二旅団挺身隊応召（ハルビン防衛部隊）。

### ソ連軍侵攻

八月九日、ソ連軍による空襲、市内展開。ハルビン市中心部で戦車壕を掘る。

八月十五日、ラジオで重大放送（敗戦を知る）。

八月十六日以降、北滿からの避難婦女子の救援等に忙殺されたが、引き続き武装解除され、ハルビン郊外の兵舎へ移動滞在。八月下旬く九月上旬、ソ連の指示

により食糧調査に当たり、特に塩、味噌等に重点が置かれた。

#### シベリア抑留への旅

九月上旬ハルビン出発、海林かいりんに集結、ソ連兵監視のもと天幕生活に入る。十月十日牡丹江出発、約二日間ほどで十月十二日入ソ。イズベストコーワヤ第四地区タランジャン一〇九収容所に十月中旬入所。移動中の記憶はあまりない。

#### 抑留中の生活

収容所に入ると早速冬の燃料確保のため、薪の伐採等に駆り出され、空腹と寒さで慣れない仕事は大変であった。十二月に入ると本格的な重労働に入り、主としてシベリア鉄道とバム鉄道とを結ぶ支線の側溝工事並びに線路敷設をする碎石の採取等に従事。二十名くらいの班長を命ぜられ、厳しいノルマが課せられ、直接食糧の配給に影響し、班員の掌握とノルマの達成に苦勞の連続であった。特に班員の構成に問題があり、同僚間で盗みが横行し、悩みが絶えなかったが、班員の融和とノルマの向上に心を砕いた結果、百%以上に

なり、食糧事情も徐々に良くなり、ホツと安堵しました。

二十一年三月から、かねて満州ハルビン学院特修科の折習ったロシア語が役に立ち、糧秣倉庫並びに縫製工場の通訳に就くも、コウリヤンのスूपと黒パンの食事で十月、栄養失調で一週間ほど入院、退院後もとの収容所に通訳として勤務する。二十二年一〜三月、糧秣倉庫の夜間警備にロシア人と交代で当たったが、冬期間で夜であり、寒さは格別厳しく大変苦勞したが、四月から糧秣倉庫の通訳に戻り一安心した。

#### 抑留者の統制管理

二十二年四月ごろから民生化運動が盛んになり、新聞並びに幹部による指導が多くなってきた。ハラシヨラポータから先に帰国させるという噂が広まった。

#### 帰還

ロシア上級中尉が大変理解ある軍人で、元ドイツの捕虜の経験があり、陰に陽に世話になり、五月ごろ帰国する者のリストに加えていただき、民主化しない者の移動援助をしながら六月上旬、一〇九収容所を出発。

第一回目の帰還者二十人の中に入り、各收容所を転々としてナホトカ着。昭和二十二年七月二日、ナホトカ港出港（第三十回引揚船）にて特に問題もなく懐かしい舞鶴港上陸、七月十日復員。

#### 帰国後の生活

昭和二十三年三月、満州での炭鉱勤務の経験により平の配炭公団に勤め、二十六年九月から三十三年三月まで中学校、小学校の教員、三十三年四月から四十五年一月まで病院事務、その後インテリア会社に入社、昭和六十三年三月まで勤務する。

今振り返ってみると、シベリア抑留生活も苦勞が多かったが、徐州作戦に参加したときの方が辛かったように考えられる。また、大陸に夢を託した青春時代から一転して故郷に帰った身として、長男でありながら弟が親の跡継ぎになり、職場も幾度かわったが、特に不利な点はなく年金生活に甘んじている。

### シベリア抑留

#### 苦節四年間の思い出

神奈川県 境 田 伊 俊

昭和二十年八月十五日昼過ぎ、すぐく速い戦闘機が三機飛行するのを見た。「ああ、日本にもあんなすばらしい飛行機があつたのか」と思っていたら、何と敵ソ連の飛行機だとの報告を聞き、びっくりした。それから一時間後、無線連絡にて、日本はボツダム宣言を受諾して連合国側に無条件降伏したとのお知らせを受けた。その時の戦友たちの表情といたら、ただただ茫然としてだれ一人口をきく者なく、ただ余りの悔やしさに襟章をちぎって投げ捨て男泣きする戦友もいた。二日後、連隊本部に集合との命令により全隊員本部に集合。終戦について連隊長より種々訓示を受けた。それには、我々の意に反し、やむを得ずソ連軍から武装解除を受けることになる、諸氏はその指示に素直に